安曇野市公民館報

安曇野市
中央公民館
No.57 2020.11.4
TEL71-2466

三郷公民館ふるさとづくり講座

ふるさと巡り

三郷公民館は、10月４日に初企画講座「ふるさと巡り」を楡地区で開催した。地域の方々から「自分が暮らす地区はどんな場所かと問われてもなかなか思い浮かばない」という声を聞き、企画した講座である。地区内の主な史跡を巡り、宝物を知り、地区内の顔見知りを増やすことをねらいとして楡地区公民館との共催で開催し、参加者も楡地区居住者に限定した。

コロナ禍の真っただ中であったが、楡地区のみなさんの理解のもと感染防止対策にご協力いただき、開催することができた。

参加者は小学生２人を含む12人で、講師の元三郷公民館長で三郷郷土研究会会長の千國温さんの案内で各所を訪れ、説明を受けた。

最初に住吉神社を訪れ、祭られている神々や建築物等について話を聞いた。県内だけでなく全国にある住吉神社との関係についての話に参加者は聞き入っていた。続いて巡った場所では、かつて郷蔵や学校、阿弥陀堂、寺院などがあったことなどを知ることができた。その中でも阿弥陀堂跡と龍峰寺跡の両地に残っている「宝筐院塔」（供養塔）が、安曇野一帯では希少な中世の石造塔であるという説明を受け、古くから開けた地であることに参加者は驚きの様子だった。後半に訪れた銀杏堂では、貞享義民騒動で重要な役割を果たした小穴善兵衛とその家族が眠る墓石の前に佇み、この地を守っている末裔の小穴善彰さんからも、お堂や墓石についての話を聞いた。

参加者からは「地区の歴史がよくわかる企画だった」「またやってほしい」という感想が聞かれ、小学４年生の児童からは「楡には神様がいっぱいいた。歴史がたくさんあるんだと思った」と喜びの声が聞けた。

明科うまいもん朝市

平成30（２０１８）年、明科いまちつくろうかい!!発足５周年記念事業として始めた「明科うまいもん朝市」は、今年で３回目を迎える。コロナ禍の中、開催そのものが危ぶまれたものの、９月６日、無事に開催する事ができた。当日は台風の影響により蒸し暑く、不安定な空模様であったが、幸い開催時間中は雨に降られることがなかった。

三密回避の観点からコンサートなどのイベントの開催は見送り、例年会場としている明科公民館前の駐車場を広く使い、他地域へのポスター・チラシの配布を中止して宣伝を明科地域に絞るなどの対策を講じた。結果、口コミで集まったフリーマーケットは15店の出店があり昨年より多かったものの、来場者数は伸び悩み２００人くらいだった。人混みを避けるため来場を自粛した方もあったためだろうと思われる。それでも、地域からの野菜、果物、海苔、安曇野放牧豚、カレー、おやきなどが売られ、会場はにぎわっていた。

明科いいまちつくろうかい!!は、平成24（２０１２）年12月に明科公民館が明科支所との複合施設として市内の他地域に先駆けて完成した際、市民と行政の協働のまちづくりを構築し、活気に満ちた地域づくりのための住民組織としてスタートした。地域にある明科高校は会のメンバーであり、まちづくりには欠かせない存在である。あやめまつりのマスコットキャラクター「リーリオ」は高校生の手により作成されたものだ。今年は参加がかなわなかったが、例年は潮神明宮のお祭り、あやめまつりやこの朝市で水風船や綿あめなど、子どもたちが喜ぶような出店で協力してくれている。

現在、明科駅周辺の再整備が進められているが、「市」が人と人との交流の場として駅周辺部のにぎわいにつながる事を期待したい。

私は一生懸命

小出 久男さん（明科）

左から３人目が小出さん

小出さんは明科地域の社交ダンスサークルを主宰し、週に2日、明科公民館を拠点に活動している。コロナ禍での活動のため、小出さんは、会場の換気をして会員の皆さんの健康管理に気を配っていた。

取材はラテンエクササイズクラブＡｚｕｍｉｎｏの活動中に行った。若い頃は、ボウリングや軟式テニスなどのスポーツが好きで行っていたそうだ。しかし、年を取るとともに捻挫や肉離れの不安から、ふと思いついたのが若い頃に興味を持ってちょっとだけやっていたダンスだった。これなら80歳くらいまでやれるだろう、と始めたのがきっかけだった。やるなら周りの人たちに「ダンスはきれいだなあ、格好いいなあ」と思ってもらえるように、そして踊っている自分たちも気持ちよく楽しく思えるダンスをしたいと思い、コーチャーを招いての講習会や練習会で技術の向上に努めている。取材当日、会員が曲に合わせて楽しそうに踊る姿からも、小出さんの思いが感じられた。

総員約50人の会員は３つのサークルに参加して楽しめるようにしている。最初は「アヤメＳＤＣ（スポーツダンスクラブ）」に入会して親睦を深める。より高度な技術を修得し、芸術的な踊りで競技会出場を目指す方は「ＤＳ（ダンススポーツ）安曇野」に入会し研さんを積んでいただく。感染予防のため、今はいつも決まったカップルで活動を続けているそうだ。ひとりでもダンスを楽しみたい方は「ラテンエクササイズクラブＡｚｕｍｉｎｏ」への入会をお願いしている。

平日は椎茸栽培に精を出していると話す小出さんだが、踊っている姿は若々しく、ダンスにかける情熱は並々ならぬものがあると感じた。

花：アキノノゲシ
絵：加々美　豊

古きを尋ねて

㊳田沢神明宮（豊科）

田沢神明宮は光城山の南麓にある。社叢は市指定の天然記念物で、うっそうとした木々に囲まれている。砂利が敷かれた参道に、ひときわ大きな木製の神明鳥居が建てられている。

豊科地域では、歴史が古い神社である。参道の先に広がる社地は、正面奥に拝殿があり、その向かい側には神楽殿がある。本殿は、神明造で寛政年間（１７８９～１８０１年）に建てられている。神社の裏手には光城山の登山口がある。また、神明宮の西側の尾根上には田沢城跡があり、光城山の登山道に面している。

田沢地区の発祥地は、田沢川の下流域で、神明宮は田沢川を少しさかのぼった右岸に位置している。犀川の段丘の上にある町田地籍には、当地を鎌倉時代に開発した小県郡海野庄（うんの）の海野氏の一族の館跡が存在する。海野氏は鎌倉時代に会田御厨（みくりや）（伊勢神宮の荘園）の地頭として来住したもので、当地はその一族と伝わる四郎の開拓地と考えられ、会田神明宮を分祀した御厨神明宮である。

毎年４月の第１土・日曜日には例大祭が行われ、市無形文化財に指定されている「田沢神明宮奉納獅子舞」が勇壮に披露される。

神明宮の参道脇に、長さ2・5メートルくらいの船型石がある。もとは田沢川左岸にあったが、今は神社の左手入り口にあり、大事に祭られている。この石の由来記によると「安曇郡開拓の祖、日光泉小太郎神明宮（天照皇大神）の神恩に報いんために天の磐舟を造りて献げ置きし処、何時しか岩舟に変ぜり、天文年間心なき者此の舟石に穴をうがち砕かんとしたところ神罰に依り、其の者俄に死せりと伝承せられる」という伝説がある。これは、泉小太郎が神の恵みに報いるため、神が乗る堅固な舟を造り献げ置いたものが岩舟に変わったが、この岩舟には神霊が宿っているので損傷したりしてはならないとの伝承のようだ。

参考文献
豊科町誌
豊科町の土地に刻まれた歴史

地区公民館だより

二木地区公民館（三郷）

過去は全戸数が１００戸に満たず、主に農業をなりわいとしていた二木地区であったが、徐々に農家戸数が減少した。しかし昭和50年代頃からは三郷支所、小中学校や駅が近いなど立地条件の良さから人口が増え始め、近年はさらに農地転用により宅地化が進んだことで、他地域からの転入者が増え、直近では人口１００５人、世帯数３２０戸となっている。

このような地区の変遷と背景をもとに、公民館では世代や出身、職業を超えた新旧区民の交流に重点を置き、区民が「絆を深める」機会を持てるよう、様々な行事を計画し開催して地域づくりの「活動の場」を提供している。

昨年のふれあいコンサート

年２回発行の「二木公民館だより」では、年度始めに館長、副館長、主事と体育部、文化部、生活産業部、女性部の各部長の紹介と今後の活動及び行事予定を周知し、それぞれの行事については開催時期前に回覧をし直し、区民に積極的な参加を呼びかけている。

例年は公民館、各部が中心となり、夏祭り、健康教室、各種講演会、スポーツ大会、学習会、体験会などを開催し、三郷公民館主催行事へも参加している。しかし、今年は思いもよらぬコロナウイルスの影響で、楽しみにしていた数々の行事は開催できないものもあった。特に、昨年初めて開催した音楽のふれあいコンサートはピアノ、バイオリンの演奏、歌などがあり、大変好評だったので中止となり残念だった。

今年で６回目となる生活産業部の「りんごのもぎ取り体験」は、屋外ということもあり開催する予定である。農家の手伝いとなるりんご収穫の他に、栽培についてもわかりやすく学び、区民がりんご農家への理解を深める場となっている。今年はできないが試食もあり、持ち帰りもできることから参加者も多く人気がある行事だ。

「コロナ禍でも区民の皆さんが交流し、絆を深める機会はできるだけ多くつくっていきたい」と手塚公民館長は話している。

グループ紹介

堀金俳句会（堀金）

堀金俳句会では奇数月の第３土曜日の午後に、俳句結社「りんどう」の降旗牛朗先生に講師をお願いして句会を開いています。主な会員は堀金地域の住民ですが、地域を限定してはおらず、参加していただける方は大歓迎です。

定例会では、会員が事前に雑詠で３句ずつ投句し、それを係が一覧にまとめておき、句会で選句（作者名は伏せて、各自が良いと感じた句に点を入れる）します。その後、それぞれの句について良いと感じたり疑問に思ったりした事を話し合います。批判はせず、感じたことを素直に言ったり、他の人の意見を聞いたりすることで、自分の句を客観的に見ることができます。先生の指摘にハッとしたりなるほどと感心したり、目を開かれる思いをすることもしばしばで、静かだけれど活気のある時間です。

俳句は基本的には17文字という制限のある中で季節を表し、自分が感じた事を表現します。伝えたいことを見つけて、それを自分以外の人に伝え共感を得るにはどうすれば良いか、あれこれ試行錯誤するのはパズルのようだと思います。表現のためのパズルの「ピース」は無限にあり、どれを選び、どう組み合わせるかで同じことを表現しても全く違うものが出来上がります。「ピース」を一つずつ知識として得る喜びと、組み合わせて使う難しさと楽しさが、古来人を魅了し続けてきた理由の一つなのかもしれません。

俳句を作る時に使うのは右脳なのだそうです。そのため老化の防止にも大変良いのだとか。確かに、俳句が趣味という人には年齢不詳な方が多いのです。一人で俳句を作ったり、新聞などに投句したりするのも楽しいことですが、疑問や喜びを分かち合う仲間があることが、メンバーの皆さんを生き生きとさせてくれているのではないでしょうか。

（堀金俳句会代表　青柳邦栄
文　財津尚子）

随時メンバー募集中です。
問い合わせ先
堀金公民館　72・5796

ほたか

古文書公開講座

穂高公民館は9月16日に「古文書公開講座」を開催した。講師は、穂高古文書勉強会3代目会長の百瀬宗治さんと4代目会長の井口誠司さん。講座には7人の受講者と古文書勉強会会員を合わせて20人以上が参加した。

百瀬さんは、古厩の庄屋だった百瀬さんの家に伝わる古文書の中から、天蚕を飼育する土地貸借をめぐる騒動の関係者が作成した証文の解説をした。また、明治の初めに天蚕視察のため来村した英国外交官一行を描いた貴重な掛軸も披露された。

井口さんからは、江戸幕府五代将軍徳川綱吉の「生類憐れみの令」の内容の通達文書（穂高の元大庄屋等々力家所蔵）の解説があり、参加者は興味深く聞いていた。

とよしな

楽しい菊づくり講座

豊科公民館は「楽しい菊づくり講座」の3回目と4回目を8月19日と10月5日に開催した。

8月は「柳芽」と呼ばれる不完全な花芽の見極め方を聞き、受講生が育てている菊で実際に柳芽の処理の実習を行った。

10月は大きく開く菊花の形が乱れないように輪台を取り付ける方法を学び、コツを教わりながら輪台を取り付けた。

受講生たちは先生から教わったり、受講生同士の情報交換から学んだりして、丹精込めた大輪の花が咲くのを楽しみにしていた。

みさと

初心者写真教室

三郷公民館は6月から5回にわたり初心者写真教室を開催した。夜間の開催だったが「カメラを使いこなしたい」「自分の思い通りの写真を撮りたい」と意欲がある幅広い年代の10人が参加した。

講師の嶋田さんから、各回に専門用語、撮影時のマナー、構図、カメラ機能の設定などを学んだ。最終回の9月18日には、参加者が撮影した写真をあらかじめ嶋田さんが印刷しておき、各自で額装をして、撮影秘話とともに皆で鑑賞し、講師の講評があった。10月の文化産業展では成果を披露した。

参加者たちは「さらに写真撮影が楽しくなった」「これからの撮影が楽しみ」と口々に語っていた。

ほりがね

拾ケ堰サイクルツーリズム

堀金公民館は9月12日に「拾ケ堰サイクルツーリズム」を開催した。コロナ禍を踏まえてか参加者は4人だったが、ガイドの山田公民館長を先頭に、堀金公民館を出発した。

あづみのやまびこ自転車道を駆け抜けて、松本市島内奈良井川の取水口、拾ケ堰頭首工まで走り、堀金公民館へ戻った。さらに流れを追って、烏川放水口までの道のりを往復し、約30キロのサイクリングを楽しんだ。

参加した宮島ひなた君（堀金小6年）とかなた君（同4年）は、家族で出かけるために母と祖父に買ってもらったというクロスバイクとマウンテンバイクをさっそうと乗りこなしていた。

あかしな

明科歴史探訪講座 おみやげを配りに来た神職

明科公民館は8月25日に「明科歴史探訪講座」を開催し、約40人が参加した。明科の歴史や文化などを紹介する冊子『明科の宝』の内容をさらに深めた話を聞く講座だ。講師の逸見大悟さんは、護符と茶やアワビなどを手土産に神官が檀那を回った内容について書かれている『しなの丶国道者之御祓くはり日記』の概要と書かれた背景を語った。

平安時代、中央の貴族や有力な寺社などが所有する私有地である荘園が各地にできた。明科の一部は伊勢神宮の荘園「麻績御厨」の範囲内にあったといわれる。荘園は鎌倉時代に台頭してきた武士に侵略され領主の権限が低下し、戦国時代には実体をなさなくなっていた。収益がなくなった伊勢神宮は荘園や周辺に住む人々を檀那として組み入れ、個別に金品や土地を寄進してもらう事で収益を得たとされている。参加者は興味津々の様子だった。

欅

今年はコロナウイルスに翻弄され、多くの「人と会う、人が集う」機会が減るなかで、人が触れ合うことの大切さを実感した。新しい生活様式を意識しつつ、日々の暮らしを楽しみたい。（M・Y）